

氏名	平田 幸子
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	乙第 1458 号
学位授与の日付	令和 2 年 6 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 4 号に該当
学位申請論文タイトル及び掲載誌	Preservation of the lesser occipital nerve prevents occipital sensory disturbance after microvascular decompression: long-term results 顔面痙攣に対する頭蓋内微小血管減圧術における小後頭神経保存による後頭部感覚障害軽減の長期成績 World Neurosurgery 2019 年 12 月 8 日掲載受理
学位審査委員 (主査)	教授 永島 雅文
(副査)	教授 山元 敏正、教授 三鍋 俊春、教授 大宅 宗一

論文内容の要約 (要旨)

【目的】

顔面痙攣 (HFS) に対する後頭下開頭神経血管減圧術 (MVD) では術野に小後頭神経 (LON) が出現する事があり、損傷により後頭部の感覚障害を生じうる。術中の LON の保存により感覚障害を軽減・防止出来るが、長期成績や障害の程度についての報告はない。術中 LON の所見と、術後 1、12、24 か月の後頭部感覚障害の程度について検討した。

【方法】

過去 9 年間に当院で HFS に対して MVD の初回手術を受け、術後 1 か月追跡しえた 257 名を対象とした。術中の LON の状態と、術後の後頭部感覚障害の程度を評価した。術中 LON の所見は以下の 3 群に分類した。A 群 (保存群) : LON を術野に確認し保存しえた例。B 群 (未確認群) : LON が術野に確認されなかった例。C 群 (切断群) : LON を確認したがやむなく切断した例。後頭部感覚の程度は Visual Analogue Scale (VAS) を用いて、1 点 (無感覚) ~10 点 (正常な感覚) の 10 段階評価した。術後 1 か月追跡しえた 257 名については術 1 か月後の VAS、このうち術後 2 年以上追跡しえた 175 名については、術 1、12、24 か月後までの VAS の経時的変化と長期成績を調べた。

【結果】

術後 1 か月追跡しえた 257 名 (A 群 112 名、B 群 117 名、C 群 28 名) において、術 1 か月後の VAS は A 群、C 群と比較して、B 群で有意に高かった。また術後 2 年以上追跡しえた 175 名 (A 群 74 名、B 群 85 名、C 群 16 名) においても、術 1 か月後の VAS は A 群、C 群と比較して、B 群で有意に高く、すなわち後頭部感覚が温存されていた (B 群: 7.9 ± 0.2 vs A 群: 7.3 ± 0.2 、C 群: 6.8 ± 0.4)。術 24 か月後では B 群、A 群では、C 群と比較して有意に後頭部感覚が温存されていた (A 群: 9.7 ± 0.1 、B 群: 9.7 ± 0.1 vs C 群: 8.8 ± 0.4)。経時的にみると、全ての群で術後 1 か月から 12 か月の間に有意な感覚障害の改善が認められた。また VAS の 9-10 点を“感覚障害なし”と定義した場合、術後 24 か月での治癒率は、A 群 91.9%、B 群 92.9%、C 群 62.5%であり、C 群で有意に低かった。

【結論】

術1か月後には、B群でのみ後頭部感覚はほぼ正常であった。A群ではLONを保存したにも関わらず、術1か月時点では後頭部感覚は障害されていた。しかし、術12か月後にはほぼ正常な後頭部感覚まで改善を認めた。これは術中LONの乾燥、牽引などの操作による一過性の機能障害あるいは変性を認めたためと考えられた。C群でも感覚障害は改善しうるが、術後24か月が経過しても改善率は有意に低く、正常な後頭部感覚には至らなかった。顔面痙攣に対する後頭下開頭神経血管減圧術では、頭皮の感覚障害防止のため、小後頭神経を認めた場合には温存に努めることが重要である。